



第 50 号
令和 4 年 1 月

研究室だより

松下道信

コロナ禍の下での生活も二年目を迎えました。一昨年末から広がりを見せたコロナウイルスは流行・拡大を繰り返して、本年度に入ってから第三波、第四波、第五波と幾つかの大きなうねりとなって襲来しました。第五波さなかの八月には一日の感染者数が二万人を超え、私たちの日常生活に大きな影響を及ぼしました。

四月一日にまん延防止等重点措置が大阪・兵庫・宮城で施行されると、徐々にその対象地域は拡大。三重県にも五月七日から六月三十日まで適用され、その後、第四波がやや落ち着いた七月を挟んで八月二十日から九月十二日まで再び施行されました。さらに、四月二十五日以降、東京や大阪等一部地域に出されている非常事態宣言も八月二十三日には三重県に発出されました。結局、非常事態宣言が全面解除されたのは九月三十日、既に後期の授業開始から十日が過ぎてからのことでした。

本来昨年行われるはずだった東京オリンピックは一年間延期され、七月二十三日に開催式を迎えたものの、八月八日に閉幕するまで全面的に無観

客で実施。九月予定の三重とこわか国体も中止となりました。

大学に目を向けると、昨年同様、参拝見学と月例参拝は中止、入学式は学科ごとで執り行われ、神宮参拝は取りやめとなりました。その他、毎年二月に行われる卒業生による謝恩会は今年も開催は難しそうです。授業は昨年度の後期に引き続き、一部、大人数のクラスがオンライン授業で行われたほか、教室における受講者数の制限が引き続き行われています。後期最初の非常事態宣言中は、全面的にオンラインでの講義でした。全国的に二回のワクチン接種が奨励され、本学でも夏から職域接種が始まりました。マスクの着用、建物の入り口に置かれた消毒用アルコールも今では見慣れた風景です。

もっとも国文学科の活動では、文学散歩こそ中止となったものの、オンラインでの開催ではあります。今年も研究発表会と講演会を開催することができました。

今年の倉陵祭はオンラインでの開催となり、研究発表会もそれに合わせて十月三十日に行われました。発表題目は、安保花音氏「谷崎潤一郎「痴人の愛」論―ナオミと譲治の関係―」、下村紗瑛氏「源氏物語」の研究―光源氏と玉鬘の恋愛に

目次

研究室だより	松下道信	1
退職のご挨拶	小堀裕平	2
委員長より	大嶋美輝	3
〈研究ノート〉		
『ころ』の「西洋人」考	水野隆司	3
文学情報をウイキペディアに	岡野裕行	4
上代文学研究部会活動報告	辻希乃華	5
中古文学研究部会活動報告	藤本かなえ	6
近世文学研究部会活動報告	兒島靖倫	7
国語学研究部会活動報告		
谷川奈穂・打田楓茄		8
漢文学研究部会活動報告	井上幸之佑	9
令和二年度修士論文目録		10
令和二年度卒業論文目録		10
令和二年度卒業論文報告	岡野裕行	11
令和三年度講義一覧		11
令和三年度研究発表会発表要旨		12
令和三年度講演会報告	辻希乃華	13
合格・就職体験記		14
国文学会活動報告		15
国文学会会則		16

ついで、「水森誠人氏「黒島伝治論」「渦巻ける鳥の群」における正宗白鳥の影響」。博士課程前期の学生三人による、若い息吹を感じさせる発表でした。また、十一月十一日には武庫川女子大学の影山尚之教授による「万葉集―恋心の形象―」と題する御講演が行われました。ユーモラスな語り口とその間ににじみ出る繊細な言語感覚に、万葉の詩歌を読み解く要諦を垣間見た気がします。

ところで、やや御報告が遅くなりましたが、昨年度末をもって小堀洋平准教授が他大学に転出されました。平成二十七年秋に本学に助教として着任以降、五年半にわたり、近代文学を担当された小堀先生は、実直かつ物静かなお人柄ながら、その熱心な御指導により多くの学生から敬愛される存在でした。今後の御活躍を期待したいと思います。ただ、いささか急な転出であったこともあり、本年度は近代文学関係の講義を開くことができませんでした。来年度は従来どおり開講できよう準備中です。

その他、十一月二十日には本学が主催校となり、日本道教学会第七十二回大会がオンラインで開催されました。道教学会の大会は漢文学の先任野村茂夫教授の下でも一度開かれており、実に二十一年ぶりの開催です。その野村先生は本年二月に御逝去。謹んで御冥福をお祈りします。

現在、ギリシア文字で表されるコロナウイルスの変異株は、十五番目の字母のオミクロンまで進みました。強い感染力が指摘される変異株で、実際、一月に入り、またもや急激な流行の拡大から第六波へ突入したとの報道がなされています。ところで、国文学科ではこの二月に三年生のフイー

ルドワークを実施する準備を進めていたところでした。ここには少しでも学びの機会と人とのつながりを取り戻したいという思いがあったのですが、その思いもむなしく中止となりました。まだまだ我々の試行錯誤は続きます。

(国文学会会長・教授)

退職のご挨拶

小堀洋平

昨年三月末に皇學館大学を退職した。専任教員としては、五年半にわたり本学に在籍したことになる。

着任の際、先生方に、これからは宇治山田出身の作家尾崎一雄についても書いてみたい、とお話したことを憶えている。一雄の父八束が神宮皇學館の教授だった縁もある。『暢気眼鏡』『虫のいろいろ』『父祖の地』といった尾崎の作品は以前から好きで、私なりに考えていることもあったが、五年半の在職中に、私はついにその約を果たせなかった。自由な研究の時間を与えてくださった先生方に対して、これはいつか必ずまとめなければならぬ仕事だと思っている。

今でも鮮やかに思い出すのは、学生たちと近代文学を読み、考えた時間である。特にゼミでは、私自身かえて学生発表から新たに気づかされることも多かった。九月に着任して、それまで鏡花研究の三品理絵先生の担当されていた学生たちの卒論指導を引継いだのが、私の最初のゼミ指導の経験だった。それ以来、六期にわたる学生たちのゼミを私は担当した。最後のゼミ生の指導は三年生の一年間で打切りとなり、さらにその次に私のゼミを選んでいただいた当時の二年生たちには、実際の指導を一度も出来ずに終わった。それにもかかわ

らず、昨春私を温かく送り出してくださいました先生方と学生たちに、改めて感謝申し上げます。

近代文学研究部会の活動も、とりわけ印象深いもののひとつである。その活動の成果は、この会報の毎号の誌上に、参加学生たちの手で綴られている。近代文学の草稿・原稿を読む、というテーマで行ってきた部会活動では、最初『坊っちゃん』の原稿を探り上げ、つづいて長く花袋の『コサアク兵』翻訳草稿に取り組んで、最後の一年は朔太郎の詩稿を読んだ。毎週、私の研究室で開かれた研究会では、私はいつも平凡な解説者にすぎなかったが、参加者にはいわば一筋縄ではない人たちが（これは褒め言葉である）が多かった。学生たちはそれぞれに、豊かな陰影をもって、いろいろなことを考えていた。中に、中国からの留学生が二人いた。また、参加者から四人の大学院進学者と一人の詩人が出たことを、私は今でも徳としている。

思い返して、授業や研究会で、採上げるべくして採上げられなかった素材も多い。たとえば、私の手元に、加藤介春の詩稿がある。介春は、今ではほとんど忘れられているが、朔太郎とたがいに影響しあった詩人である。その原稿から、「うすぐらい鳥の思想」を歌った詩『鴉』の冒頭を引く。

このたくさんな鴉は

木から生れた、野から生れた、

大空の雪の中から生れた、

そしてみんながあつまつて来た。

三角に見えるのがあり、

長うなり、まるうなり、平たくなり、

或ひは鉤の如くなるのがあり

そしてみんなが散らばつてしまった。

——「そしてみんなが散らばつてしまった。」

たしかに、そんな気がしなくもない。だが、——
木に、山に、野に
鴉がゐなくなつたら、
この世界には

おそらく影がなくなるだらう。

こう介春がいう「鴉」たちは、いつまでもひとつの場所に集まっていず、皆行くべきところに行つてよかつた、とも思えてくる。「鴉」たちは、各々の行き先で、それぞれこの世界に必要な「影」であるだらう。

(前准教授)

委員長より

大嶋美輝

本年も昨年同様、コロナウイルスの影響によって、対面授業とオンライン授業を並行して行う運びとなりました。文学散歩は実施できなかつたものの、今年にはオンラインかつ規模を縮小して「倉陵祭」を開催することができました。また、十月には研究発表会、十一月には講演会を、どちらもオンライン上ではありますが、無事に開催することができました。

このように、情勢を鑑み、感染症対策をした上で少しずつではありますが、様々な行事が行えるようになってきた事を喜ばしく思います。

私をはじめ私の周りには、教員を目指している学友が数多くいます。来年に教育実習を控え緊張でいっぱいですが、そんな時に思い出したい短歌があります。

みがかずば 玉も鏡も 何かせむ

まなびの道も かこそありけれ

この短歌は昭憲皇后の御歌です。

どんなに素敵な素質を秘めた宝玉も鏡も、磨

かなければ光り輝かないのです。学びの道も同じであり、自ら学びに励むことで人として育つのです。

まずは自分自身が育ち続けること。そして教員になったら生徒が光り輝く手助けをできるようにになりたいと心から思います。

(三年)

〈研究ノート〉 『ころ』の「西洋人」考

水野隆司

年来高等学校の国語科教員をしていると、漱石の『ころ』の授業は幾度となく経験し、読んできたはずなのに、いまだに不思議な箇所がいくつもある。

今回も授業の下調べで通読したが、案に違わず冒頭早々に目が止まった。これまでずっと「考えてきた」ことではあるのだが。

○「猿股」の「西洋人」

『ころ』の「先生と私」の章は、鎌倉の海水浴場を舞台に始まる。友人に誘われて避暑にやって来た「私」が、偶然「先生」と出会い、掛茶屋で「先生」の眼鏡を拾ったことをきっかけにして、「先生」と語り合うようになる。

ところで「先生」が、人の「ごちゃ／＼してゐる」海水浴場で特に「私」の注意を引いたのは、「先生」が一人の「西洋人を伴っていた」からだである。

この「西洋人」は「猿股一つ」で平気な様子で、「先生」と話し、泳ぐ。

外国人の存在が当たり前の現代と違って、明治のあの時代、外国人がいかに周囲の視線を捉えたか充分想像できる。尤も「猿股一つ」のこの「西

洋人」は、現代人の筆者にもかなり特異な存在だ。○「西洋人」は誰か？

この「西洋人」は誰なのか。本文の展開上、大して重要でないかもしれないが、読み返す度に考える。漱石の創作か。モデルがあるのか。あるとすれば誰か。この堂々巡りを既に三十年以上繰り返しているのだから、筆者も大概執念深い。

在日外国人の絶対数が少なく、衆目の的になるとはいえ、明治なら既に国は開かれているのだから、日本の風俗・習慣になじんだ外国人がいてもおかしくはない。そんな外国人を漱石が個人的に知っていたからといって、特段不思議でもない。話を展開させる工夫として外国人を登場させることもあり得る。

しかし筆者は、やはり「猿股一つ」で平気な「西洋人」が気になって仕方がない。

○「彼」ではないのか!?

ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)が焼津(静岡県)を愛し、夏を魚商人・山口乙吉の家で過ごしたことはよく知られている。作品に「焼津にて」があり、セツ夫人との手紙のやりとりにも現れる。鎌倉と焼津とはかなり距離に隔たりはあるが、いずれも海浜の街(村)である。

ハーン自身水泳が得意で、海水浴を楽しみ、息子に泳ぎを教えたというし、地中海の島をルーツに持つ彼に、海はよく似合う。加えて西インド諸島で暮らした彼が、カリブ海の美しさを日々目にした姿を、我々は容易に想像できる。

松江の人々の人情に惹かれながら、冬の寒さに閉口して熊本に移ったことから、彼の熱い夏や海への憧憬が感ぜられる。

同時代を生きた漱石ならば、そんなハーンの私生活の一端を僅かでも知っていた可能性は高いのではないか。

これらのことから、誠に乱暴な想像ながら、筆

者はあの「西洋人」のモデルを「ラフカディオ・ハーン」に求めたいのである。

○漱石とハーン

漱石の年譜を見ると、彼は常にハーンの後を追いかけているようだ。熊本第五高等学校に漱石が着任したのは、ハーン離任の二年後（一八九六年）。帝国大学着任は、ハーンと入れ替わりだ（一九〇三年）。直接接点があったのか否かはともかく、漱石にとってハーンは常に前を走るランナーだった。しかもなかなか手強い相手であった。それは、ハーンが帝国大学解雇の際の騒動や、後任の漱石に対する学生の対応を見ればよく分かる。

常に意識せざるを得ない、無視できない前任者である。漱石にとって、ハーンの評価が高ければ高いほど、仕事の上でも、精神の上でも、その存在によって、「やりにくい」ことが次々生じたに違いない¹⁾。

『「ころ」の「先生」に漱石が自らの姿を反映させたのなら、小説冒頭に「猿股一つ」のハーンを登場させても、強ち無理な話と言えなくもないのではないか。

○おわりに

さすがに学校の授業では、そこまで想像力を逞しゅうした掘り下げはできない。そもそも『「ころ」の生徒に読み取らせるべき箇所は、そんなところにはない前提である。しかし読書をきっかけとして、様々な場面を無限に思い描く楽しさを生徒に伝えたいし、自らもそんな読書を楽しみたい。

「国語科の皆さんは妄想がお好きですね。」

常日頃他教科の同僚から寄せられるこの言葉も、皮肉としてではなく高評価と解したい。そんな気持ちで以上を綴った。大方のご意見を乞いたいところである。

○注

一九〇四年十二月野間真綱宛書簡に「二代目小

泉になれそうにない」とある。（『定本漱石全集』第二十二巻・書簡上・二〇一九年七月・三六〇頁）

○追記

漱石とハーンと比較は、様々な領域で可能だと考えている。例えば漱石の「文鳥」とハーン「草ひばり」の作品比較など、面白いのではないかと。（第二十四期卒業生・奈良県立法隆寺国際高等学校教諭）

〈研究ノート〉

文学情報をウィキペディアに

— みんなでつくる文学の手引き —

岡野裕行

日本初のウィキペディアタウンの事例は、二〇一三年二月に横浜で実施されたものである。まちなかに点在するさまざまな文化財や名所を参加者同士でめぐり歩いて写真に収め、図書館などの地域資料を活用して出典を明記しながら解説記事を執筆し、その成果をウィキペディアに公開して情報を共有する編集イベントとして全国各地に広まっている。日下九八氏はウィキペディアの立場から、二〇一五年の時点でその有用性を指摘している¹⁾。二〇一七年にはLibrary of the Year 2017の優秀賞を受賞するなど、図書館業界からの注目度も高まっている²⁾。さらにその後、二〇一九年一月発行の『ライブラリー・リソース・ガイド』第二十五号では、特集記事としてウィキペディアタウンが取り上げられている³⁾。そのほかにも、是住久美子氏、日向良和氏、福島幸宏氏、藤井慶子氏、伊達深雪氏ら、ウィキペディアタウンについて積極的に発言している図書館関係者も増えている。図書館が所蔵する地域資料の積極的な活用を考える上で、ウィキペディアタウンは

重要な取組みであるという認識が広まっている。筆者は二〇一六年九月に、前述の日下氏の協力のもと、本学附属図書館「ふみくら倶楽部」の学生たちとともに、三重県初のウィキペディアタウンを伊勢で実施している。二〇二二年七月には、三重県立津高等学校図書館が津市安濃町で実施しており、筆者もその開催に協力している。ウィキペディアタウンが各地域にどのような影響を与えているのかについて、小林巖生氏は次のように指摘している⁴⁾。

①それぞれの地域に関する文化情報を、ウィキペディアを通じて、より広範な対象へと発信することができる。

②それぞれの地域に関する文化情報を、ウィキペディアにアーカイブすることができる。

③文化情報に関わる諸機関にとって、それぞれの施設が立地するコミュニティの関係者と協働することができる。

④文化情報に関わる諸機関が、自館の所蔵する情報資源を活用する機会をつくりだすことができる。

⑤ウィキペディアに蓄積されていくコンテンツを、オープンデータとして広く活用してもらうことができる。

そしてこういったウィキペディアタウンの手法を応用し、文学にテーマを絞った形で実施する「Wikipediaファンガク」という取組みが、神奈川県近代文学館を会場として二〇一八年から続けられている。発案者の田子環氏は、「まち歩き代わりに企画展を見て、関連記事を執筆する」というように、アイデアの発端とその成果について語っている⁵⁾。末尾に表としてこれまでの開催情報一覧を示す。この表からは、日本近代文学に関するさまざまな用語が加筆されていることが確認できる。

「Wikipediaブンガク」の取組みは、現時点では神奈川での活動に留まっている。しかし、ウィキペディアタウンがここ数年で全国各地へと着実に広まっており、そして大学や高等学校での開催事例も増えてきていることを考えると、文学研究・教育に関わっている全国の各大学の文学部や大学図書館も、今後はこうした流れに加わっていくのではないかと予想される⁶⁾。ウィキペディアタウンの参加者には、記事の編集というプロセスを辿ることで、信頼できる情報について「調べる」「書く」という力が養われる。前述の田子氏も「ぜひ地元でチャレンジしてほしい」と述べているが、本学国文学科でも、地元三重県の文学をテーマにしたウィキペディアタウンが実施できるだろう。筆者自身の今後の研究・教育の展望のひとつとして、文学や図書館について学んでいる学生たちのためにも、ウィキペディアの編集を通じた文学情報⁷⁾の積極的な活用を構想してみたい。

注

- (1) 日下九八「つながれインフォプロ 第十八回」『情報管理』第五七巻一二号、二〇一五年、九二八〜九三二頁
- (2) 知的資源イニシアティブ「Library of the Year 2017」二〇一七年、<https://www.iri-net.org/loy/loy2017/>
- (3) 下吹越香葉「特集 ウィキペディアタウンでつながる、まちと図書館」『ライブラリー・リソース・ガイド』第二五巻、二〇一八年、五〇〜七頁
- (4) 小林巖生「ウィキペディアを通じてわがまちを知る」『マガジン航』二〇一五年、<https://magazine-k.jp/author/kobayashi-iwao/>
- (5) 前掲3、田子環「文学に特化した日本初の試み Wikipediaブンガク」一〇〇〜一〇一頁

- (6) 川村路代「大学図書館とWikipediaの連携がもたらすものは？」『カレントアウェアネス・E』第四二八号、二〇二二年一月、<https://current.ndl.go.jp/e2465>

「Wikipediaブンガク」開催情報一覧

- (1) WikipediaブンガクE: 神奈川近代文学館
実施日 二〇一八年二月二十五日(日)
主催 Wikipediaブンガク実行委員会
会場 神奈川近代文学館
新規項目 ①愛のごとく、②桂芳久
加筆項目 ①山川方夫、②三田文学、③二宮町、④田久保英夫
- (2) 第二回 WikipediaブンガクE: 神奈川近代文学館
実施日 二〇一九年四月二十一日(日)
主催 Wikipediaブンガク実行委員会
会場 神奈川近代文学館
新規項目 ①毛皮のマリー、②田中未知
加筆項目 ①寺山修司、②百年の孤独、③九條今日子
翻訳移入 ①無頼漢(映画)
- (3) 第三回 Wikipediaブンガク(松本清張)
実施日 二〇一九年四月二十一日(日)
主催・会場 神奈川県立図書館
後援・会場 神奈川近代文学館
新規項目 ①相模国愛甲郡中津村、②日本の黒い霧
加筆項目 ①松本清張、②藤井康栄、③松本清張賞、④北九州市立松本清張記念館
出典追加 ①砂の器、②旅(雑誌)
- (4) 第四回 Wikipediaブンガク(中島敦)
実施日 二〇一九年十月六日(日)
主催 Wikipediaブンガク実行委員会
共催・会場 神奈川県立図書館
後援・会場 神奈川近代文学館
新規項目 ①かめれおん日記
加筆項目 ①中島敦、②山月記、③深田久弥、④横浜学園高等学校

- (5) 第五回 Wikipediaブンガク(大岡昇平)
実施日 二〇二〇年十月二十五日(日)
主催 Wikipediaブンガク実行委員会
共催 神奈川県立図書館
後援・会場 神奈川近代文学館
新規項目 ①ながい旅、②長田軞絵、③兵士・庶民の戦争資料館
加筆項目 ①大岡昇平、②野火(小説)、③レイテ戦記、④事件(小説)、⑤鉢の木会、⑥パルムの僧院、⑦恋愛論

- (6) 第六回 Wikipediaブンガク(新青年)
実施日 二〇二二年四月二十五日(日)
主催 Wikipediaブンガク実行委員会
共催 神奈川県立図書館
後援・会場 神奈川近代文学館
新規項目 ①坂本種芳、②撰津茂和、③羽志主水、④山下利三郎、⑤L・J・ビーストン、⑥高輪芳子(※下書きまで)

- 加筆項目 ①井上靖、②ヴァン・ダインの二十則、③小酒井不木、④新青年(日本)、⑤延原謙、⑥バーネットウエーブ
- (7) Wikipediaブンガクオンライン
実施日 二〇二二年十一月三日(水)〜七日(日)
※二〇二二年秋に樋口一葉をテーマに実施予定だったが、COVID-19の影響によって開催中止となってしまうため、代替イベントとしてオンラインにて行われた。

(准教授)

上代文学研究部会活動報告

辻希乃華

本年度の上代文学研究部会は、春学期は毎週木曜日、秋学期は毎週火曜日に大島先生の研究室で活動を行った。参加者は留学生一名、三年生一名、一年生一名の計三名であった。春学期には日本書紀の仁徳天皇紀を講読したり、「尼理願の死去を悲嘆する歌」に関する論文

を読み進めたりして、上代文学に関する理解を深めていった。前年度までの研究部会では万葉集以外の作品を取り扱う機会がほとんどなかったため、日本書紀を読解していくことは他の作品に触れ、新たな視点を見出すのに良いきっかけとなったと思われる。また、秋学期は参加者が一首ずつ万葉歌を調べ、発表していく形をとった。以下、私の発表内容の概要を述べることに、研究部会の活動報告に代えたい。

今回私が調べた歌は、

なかなか人にとあらずは桑子にもならまし
ものを玉の緒ばかり(12・三〇八六)

という作者不明歌である。二九六四番歌から続く寄物陳思の歌で、桑子に寄せたものだ。実は、この歌は二句から四句にかけて

なかなか恋に死なずは桑子にぞなるべかりける玉の緒ばかり

と改変された歌が『伊勢物語』の第十四段に見られる。第十四段は『伊勢物語』において最も有名であろう「東下り章段」の一節だ。第十四段のあらすじとしては、在原業平が密通したとされる二条の后とおぼしき人物に対する思慕が語られたのち、女を盗み出して京を出たものの悲劇的な結果となる。これが原因となったのであろう、男は東国に漂泊する、というものである。第十四段は前段の内容を受けて、武蔵国からさらに遠方の陸奥国へと辿り着いた場面から始まる。ここに住む女が都からやってきた男への恋心を詠んだ歌が先に述べた歌である。

万葉集中での「桑子」とは「蚕」の意で用いられている。蚕は約一ヶ月の命しかない。「玉の緒」は時間が短いことの例えにも用いられるようである。そのため、この二つを併せて「暫しの間でも蚕になりたい」と解釈する注釈書は多い。しかし、「玉の緒」には時間が短いということ以外にも、

生命や靈魂という意味も存在するようである。この意味で解釈している注釈書には武田祐吉『万葉集全註釈』が挙げられる。「肉體は亡びても、靈魂だけが蠶だつたら良かったらう」というのである。この句、短い時間の譬喩だというのが、歌意から推して、人間でなくて、短いあいだカイコでいたらよかつたらうというのにも變だし、玉の緒の語は、短いことにも用いられるが、長いことにもいい、これだけで短いあいだときめるわけにはゆかない」との語釈を付している。確かに、玉の緒は長いことの意味にも用いられるのに、ここでは蚕の寿命が短いからと言って短いものの例えであるとしている。しかし、こうと結論付けるには根拠が薄いのではないかと思う。

さて、ここでいくつか『伊勢物語』の注釈書を参照してみよう。『伊勢物語』での蚕の解釈には寿命が短いということ以外にもいくつかの説があるということが窺えた。例えば、竹岡正夫『伊勢物語全評釈古注釈十一種集成』には「A 蚕は短命ゆえと解するもの、B 一つのまゆに雌雄がこもり契り深きものゆえ、C 単に女が日常管掌する無心の蚕を持ち出したのみ、D 娘が馬に恋されて、この世では添いとげられぬので昇天して蚕になったという伝承」とある。また、新編日本古典文学全集『伊勢物語』の頭注には「まゆの中に雌雄が共にこもるのがあるので、夫婦仲がむつまじいことのとえ」とあった。これらを鑑みると、万葉集でも単純に寿命が短いことによつて「桑子」という語が用いられたのではないという考えが浮上してくる。このような意味合いを加味して作者が当該歌を詠んでいたとするならば、蚕と想い人との深い気持ちの寄せられている技巧の凝らされた秀歌であるような気がしてくる。窪田空穂『万葉集評釈』は「相聞の心があるといふ程度の歌」と評していたが、そうとは言い難いと

私は考える。

万葉歌は、当該歌のようにほかの作品に収録されている歌が多く存在する。研究する際には『万葉集』のみにとらわれず、様々な歌集と比較することで見えてくる答えがあるのかもしれない。今後の研究に活かしていきたいと思う。

(三年)

中古文学研究部会活動報告

藤本かなえ

中古文学研究部会は吉井先生のご指導のもと、大学院生一名、四年生二名の計三名での活動となりました。活動時間は参加学生の空き時間に合わせ、相談のうえで決定をしています。

今年度のテーマは『輔親集』の輪読です。大中臣輔親とは、平安時代中期の歌人で、父は大中臣能宣、母は越前守藤原清兼女です。令外官で、天皇に代行して伊勢神宮に私的な祈願を行う祭主を代々務める大中臣家に生まれ、輔親自身も長保三年(一〇〇一)から祭主を務めました。重代の歌人で、三条天皇・後一条天皇・後朱雀天皇の大嘗会和歌を詠進したほか、屏風歌の制作や歌合でも活躍しました。

『輔親集』は、輔親の家集で、現存伝本は三類に分類されています。一類は宮内庁書陵部蔵本『輔親家集』の系統、二類は冷泉家時雨亭文庫蔵の承空本『大中臣輔親集』の系統、三類は冷泉家時雨亭文庫本『輔親集』、いわゆる砂子料紙本の系統です。一類の序によれば、『輔親集』は輔親の子女たちが父の詠草を諸家集などから拾い集めて成ったものであり、輔親自身もこれに目を通していったようです。

今回は新日本古典籍総合データベースから見

られる宮内庁書陵部蔵本（一五〇・五六一）を底本としました。

発表の基本的な手順は以下のとおりです。詞書と和歌の翻刻をし、その翻刻したものに漢字や濁点をあてて校訂本文の作成をします。さらに詞書や和歌の意味を考えて語注を付け、現代語訳しました。また、他出がないか調べました。

私が担当した歌は、梅花の歌でした。校訂本文は、

梅花

ふる年に咲はじめにし梅枝も春となりてぞ
にほひ増しける

としました。「梅枝」については、他の本に倣って「梅の花」でも良いのではないかという指摘を受けました。他出はなく、『輔親集』のみに見られる歌です。語注では、『歌ことば歌枕大辞典』や『日本国語大辞典』、『全訳古語辞典』などを用いて、「梅花」「ふる年」「咲はじめにし」「梅枝」など細かく意味を調べました。その語注をもとにした現代語訳は「年のうちに咲き始めた梅の枝も、春となって花の色あいや香りが増したことです。」としました。年が明ける前に咲いてしまったマイナスな印象を持つ梅が、春になってやっと美しくなってきたてプラスの印象に変化していったという解釈をしました。今回「にほひ」は花の色や香りと訳しましたが、「にほひ」のみで香りと意味になるのはいつ頃からかという意見が出ました。

寛平御時后宮の歌合の歌

素性法師

散ると見てあるべきものを梅の花うたてにほ
ひの袖にとまれる

（『古今集』春上・四七）

のように、『古今集』で「にほひ」は香りという意味で使用されています。よって、平安時代初期

から「にほひ」は視覚だけではなく嗅覚も表していたと思われまます。また、梅の香りを詠んだ歌は『万葉集』では一首のみですが、『古今集』では主流となつてきていることから、平安時代には嗅覚も取り入れられていたのだと考えました。輔親は早く咲いてしまった梅を心配していたが、春になって美しい色あいになり良い香りを漂わせる梅を見て、ほっとした気持ちになり、この歌を詠んだのではないかと思いました。

くずし字は講義で学びましたが、翻刻は大変な作業でした。しかし、一文字一文字翻刻していくと、和歌が解読できたときは達成感と爽快感がありました。和歌の内容についても、自分とは違う解釈を聞いて他の視点からも一度考察し直し、輔親が和歌で何を伝えたかったのか理解を深めることができました。また、語注を付けるにあたり、自ら様々な言葉などを調べることで、和歌についての知識が身に付きました。自分の知識量のなさを痛感した場面も多々ありましたが、『輔親集』の輪読を通じて、くずし字にも大分慣れ親しむことができ、大変貴重で有意義な時間であったと思います。

平安時代の物語や和歌に興味がある方は、ぜひ参加してみてください。新たな発見を得る良い機会になるはずです。

（四年）

近世文学研究部会活動報告

〔研究ノート〕

『掌中古言梯』の享受と展開について

兒島靖倫

山田常典『増補古言梯標註』（弘化四年刊）は、

清水浜臣『古言梯再考増補標註』（文政三年刊）を下敷きにして編纂された仮名遣い書である。しかし、実際には『古言梯再考増補標註』以外の文献も参照して編纂された可能性が考えられる。今般、「採録された語彙」と「頭注の記述内容」の比較検討から、その有力な取材源の一つが、小山田与清の手沢本『古言梯』（文化九年書人）であることが明らかになった。

このうち、「採録された語彙」に関しては、さらに検討の余地がある。『増補古言梯標註』が増補した語彙数は二六一語で、これを与清の手沢本『古言梯』と比較した結果、与清が書き入れた語彙のうち、三十九語が一致した。しかし、残った一二二語については、典拠不明を指摘するのみに留まる。

本報告は、山田常典『増補古言梯標註』について、さらに検討を加えることにしたい。具体的には、藤重匹龍の『掌中古言梯』（文化五年刊）を基軸に据えて、『増補古言梯標註』の成立過程を推定し、それと同時に『掌中古言梯』の享受史上における位置づけについても考える。なお、以下においては便宜を図って、『増補古言梯標註』を（常典本）、『掌中古言梯』を（掌中本）と呼ぶことにする。

（掌中本）は『古言梯再考』を底本とする横長本である。巻頭の五十音図が修正されており、語彙の排列は第二字も概ね五十音順となつていて、全部で四五九一語が採録されている。『古言梯』の諸本の中でも、このような小型本まで出現したことは、『古言梯』が相当に広い読者層を持っていた証左といえよう。したがって、『古言梯』がいかに多く利用されたかという、『古言梯』の享受と展開を知る上で、（掌中本）は欠かせない存在と考えられる。

さて、〈掌中本〉は「五十音の修正」や「書誌形態の変化」など以外、全くといってよいほど注目されていない。そこで以下においては、〈常典本〉の増補語彙と、〈掌中本〉の採録語彙との関係を見ておくことにする。また、各々の語彙を整理するに際して、記述形式には「見出し項目」「語釈」「出典注記」「漢字列」という術語を使用する。

○ 〈常典本〉と〈掌中本〉とを比較すると、〈常典本〉の典拠不明の二二語のうち、一〇八語が〈掌中本〉に見られる。このことから、〈常典本〉が〈掌中本〉を受容したとする仮説が成り立つ。以下、内容の類似性の度合に応じて、そのことを検証してゆく。

最初に、記述形式のみならず記述内容まで一致している三十六語について検討する。たとえば、「かたぬ」などは「見出し項目＋語釈＋出典注記＋漢字列」の形式で四例あり、「しは」などは「見出し項目＋語釈＋出典注記」の形式で五例あつて、「たけを」などは「見出し項目＋出典注記＋漢字列」の形式で二十七例ある。各々の記述内容を見ると、いずれも一致している。なお、〈掌中本〉の語釈は片仮名表記で、〈常典本〉の語釈は平仮名表記であるが、いずれも文章そのものに相違はない。

次に、記述内容に異同が見られる七十二語について検討する。「見出し項目」に異同が見られる語彙は、「別の活用形の併記」が六例あり、「濁音の有無」が九例ある。「語釈」に異同が見られる語彙は、全部で四十一例あり、その内訳は「新たに追加」が八例、「削除」が十一例、「省略または簡略化」が二十二例である。「出典注記」に異同が見られる語彙は、全部で五十五例あり、その内訳は「明記」が二十五例、「削除」が二例、「別の出典に変更」が九例、「簡略化」が十九例である。「漢字列」に異同が見られる語彙は、全部で

三十六例あり、その内訳は「削除」が二十九例、「別の表記に変更」が六例、「新たに追加」が一例である。

○ 以上、〈掌中本〉の採録語彙と〈常典本〉の増補語彙を比較検討してきた。結論を簡潔に述べると、記述内容の一部に異同が見られるものの、その多くは一致している。したがって、〈常典本〉は〈掌中本〉を編纂資料として利用していた可能性が高いと考えられる。この点において、〈掌中本〉は「古言梯」享受史上、有意義な辞書体文献といえるであろう。

(博士後期課程)

国語学研究部会活動報告

谷川奈穂 打田楓茄

私たちが国語学研究部会は、昨年度に引き続き、伊勢市史の活用方法を議論しています。伊勢市史の課題に、伊勢市史を制作したがそれを市民の方が活用することが少ないことがあります。この課題を解消するための方法を探っています。そして、昨年候補に挙げた、伊勢市史に記載されている内容を簡単にし、絵本にするという案を形にするべく、どの部分を取り上げるのか具体的に話を進め、近世編の「宇治山田の会合所のお仕事」と、「帯刀一件」についての話を読みました。

「宇治山田の会合所のお仕事」は、会合所に務める役人の仕事内容を記したものです。江戸・京都への出張の様子や一年間の定例行事をまとめて絵本にしようとしたが、時代考証が難しいといった意見ができました。

「帯刀一件」は、一部の身分の人が刀を所持することが禁止され、それに反発が起きた時の話で

す。しかし、身分制度の説明が子ども向けにしにくいとの意見ができました。

これらの部分を読み、話し合いを重ねた結果、古市界隈の芸能を絵本にすることにしました。理由は、話の内容が比較的わかりやすいこと、絵で表現しやすかったからです。古市は、神宮参拝客でにぎわい、娯楽の催しが多く存在しました。中でも、当時珍しかったインコ・オウムなどの鳥を扱っていた、興行師である鳥屋熊吉の実際の話を絵本にする予定です。内容は、古市に初めてゾウがやって来た様子を描きます。絵本を作成するにあたって、工夫したところは、登場人物の髪形や服装を当時と同じ様子に再現した点です。資料を収集するのに苦労しました。

途中まで作成したので、ご覧ください。

江戸時代の終わりごろのことです。
ここは伊勢の古市。



© 谷川奈穂

たくさんさんの参宮客でにぎわっています。今度ここにゾウが来るそうです。今はまだ松阪の愛宕町というところにいるそうです。西源…「知ってるかい？ 今度ここにゾウっていう生き物が来るらしいぞ。」

平太…「知ってるよ！」
藤之介…「何のことだ？ゾウっていったいなんだ？」

西源…「ゾウってのは、ものすげえ大きい動物だって聞いたぜ。なんでも牛よりも大きいらしいぞ。」

藤之介…「ほうほう。」

平太…「他には、耳が大きくて、鼻が長く、賢いらしいぞ。」

藤之介…「とんでもない生き物だな。それは楽しみだ。」

そして、ついに伊勢の古市にゾウがやって来ました。
(続く)

このように絵本の作成に取り組んでいます。今年度中に絵本の完成を目指しています。そして来年度は、この絵本をどう活用していくのか、議論を重ねていくこととします。

(三年)

漢文学研究部会活動報告

井上幸之佑

本年度の漢文学研究部会は、十二月八日に松下先生の研究室にて幕を開けた。以降、メンバーの都合に合わせてつづき、原則隔週水曜日三時講目に実施される予定である。

初回の研究部会では、参加者の顔合わせ、進め方の説明が行われ、取り上げる書物が決定した。今年度の研究部会参加者は、国文三名・国史二名。中でも一年は私のみであるため、少し不安であるが、積極的に発言していきたい。研究部会は、輪読形式で進められる予定で、今年度は『韓非子』の二柄篇を読むことが決定した。

以下、『韓非子』及び二柄篇の内容についてまとめることで活動報告に代える。

『韓非子』は全五十五篇からなる。逆鱗や矛盾など有名な故事成語の基となった説話が多く、読みやすい。これらの箇所は単純な話に思えるが、分かりやすい説話が間に挟まれることで、法の在り方や権力の在り方についての抽象的な部分を理解しやすくしている。

韓非は、『韓非子』の中で三つのことを大切にしている。

一つ目は、法術之士。法術之士とは、孤憤篇に登場することばで、法術の論理で君主の中の悪しき心を矯正しようとする者を意味する。韓非は、言実一致を徹底した人間であったため、この言葉を大切にしたいと考えられる。

二つ目は、支配の技術。細かく分けると、これは「法」「術」「勢」に分けられる。「法」とは、君主が人民を支配するために公開し、厳しく施行する法律および法制度のこと。「術」とは、君主が臣下を支配するために必要な技術のこと。「勢」とは、政治の安定のために権力を保持することである。

この中でも特に、韓非は、「法」「術」が大切だと述べている。「法」を用いると同時に「術」も用いなければ、君主は権力を維持できず、臣下を支配できないと述べている。今年度読む二柄篇の二柄もこれに該当し、「法」「術」について述べられている。

三つ目は人間観と世界観。これは主に例えて用いられる説話に多く登場する。韓非は、法の支配が崩れやすくなる状況と、それについての対処法・防止策としての韓非の主張に話は進んでいく。説得力をより持たせるためにも、韓非は、人間観と世界観を大切にしたのであろう。

先ほども少し述べたが、二柄篇においては、君

主が持つべき権力と、そして君主が臣下を支配する際に注意すべき二つのことが書かれている。それは、「殺戮」と「慶賞」である。どちらも君主自身が用いなければ、それを悪臣に利用されてしまい、国を滅ぼされる危険があると述べられている。また、臣下を利用する際は、君主の主観や私情を排除し、法に従って行わなければならないと述べられ、権力を失ってしまうため注意すべきだと述べられている。二柄篇は『韓非子』の思想がよく表れている箇所として、高校の教科書に掲載されることも多い。

私が法家思想に興味を持ったのは高校時代の古典の授業である。高校時代は、孔子などの徳治主義の文章や歴史ものといった教材が多かったため、法治主義の思想家の文章に全く触れてこなかったからである。大学入学までの期間に課された読書感想文の課題図書の一覧に『韓非子』があった。当時は説話の箇所しか理解できなかったが、これをきっかけにより深く理解したいと思った。そこで、研究部会で扱ってもらえるよう松下先生にお願したところ賛成してくださったため、今回、このように読むことができた。私の希望がかなって大変うれしい。

本年度の漢文学研究部会は、コロナウイルスの影響により、回数が例年と比べると大幅に少ないが、意欲的に取り組み、充実したものになりたい。(一年)

プロフィールが「Bibliobattle of the Year 2021 特別賞」を受賞

三重県教育委員会と協力しながら、三重県におけるビブリオバトル普及活動に十年近く関わって貢献し続けていることが評価されました。

令和二年度
修士論文目録

(令和三年三月授与)

古事記神話の研究

長田伊央

―天石屋戸開き「咲(わらひ)」を中心に―

(令和三年三月)

令和二年度

卒業論文目録

(令和二年九月卒業)

『忠臣水滸伝』の研究

陳 嘉勳

―『通氣粹語伝』をめぐる―

万葉集と玉台新詠の比較文学的研究

馮 霞

―初期七夕歌と七夕詩を中心に―

(令和三年三月卒業)

太宰治「斜陽」論

本田 将也

『源氏物語』の研究

浅野 有希

―滯標巻の予言は実現したか―

夏目漱石「夢十夜」論

阿部 貴大

―第七夜の考察―

谷崎潤一郎「痴人の愛」論

安保 花音

―ナオミと讓治の関係―

黄庭堅について

石田 明里

紙マンガと電子マンガの行方

石野 茜

『南総里見八犬伝』の研究

石野 裕也

太宰治「トカトントン」論

市川 晴菜

―〈トカトントン〉の音について―

太宰治「人間失格」論

伊藤 真有

―遺書から見る「人間失格」―

造像記について

伊藤 良華

爛柯の説話について

井上美留香

地域と文学について

岩崎 晴菜

―熊野を事例として―

志貴皇子の研究

上嶋 真実

三重県・和歌山県境の言語研究

上林 蒼生

―ジャガイモとトゲをめぐる―

万葉集、安倍虫麻呂歌の研究

宇陀 木人

篆書体における字形の変遷

打田 智也

志賀直哉「范の犯罪」論

戎末 涼馬

―「剃刀」と刑法を参照して―

『源氏物語』の研究

大形 桃子

―浮舟と中将の君の母子関係―

東野圭吾研究

大橋 沙季

―「白夜行」について―

手品の文学研究

岡村 真衣

万葉集「梅花の歌三十二首」の研究

岡本 普宇

江戸川乱歩研究

尾崎ななみ

―「人間椅子」を中心に―

芥川龍之介研究

片岡実実都

―中世古典作品とのつながりから―

泉鏡花「高野聖」論

加藤 彩花

―「水」と「蛇」による枠組みの構造―

玉城町方言の研究

河合 徹也

子どもの読書とビブリオバトル

河野 亜美

虞世南が王羲之の書風を

岸江 佑紀

受け継いでいるかについての研究

大伴旅人の研究

北野 竜己

―亡妻挽歌をめぐる―

水をめぐる語彙の研究

木下絵里加

―「水分」と「水気」について―

『百人一首』恋の歌の研究

久野いずみ

日本舞踊の用語の研究

久保田明里

三重県の言語研究

小林 大斗

―言語境界地帯としての桑名―

『源氏物語』の研究

小山 ゆう

―六条院支配の論理―

近代文学と教育

佐々木大地

―「夢十夜」をめぐる―

伊賀地方の言語研究

佐治 朱梨

―「だーこ」について―

気象用語についての研究

佐藤 優

米芾の書法

志岐 拓海

欧陽詢について

新海 真依

―九成宮醴泉銘が

「楷書の極則」とされる要因―

『源氏物語』の研究

新家 萌愛

―浮舟に見える和歌と本心―

『雨月物語』巻之二「菊花の約」の研究

永里満里奈

夏目漱石「夢十夜」論

須崎垂莉沙

―第一夜について―

助詞の欠落に関する研究

高橋 孝輔

芥川龍之介「河童」論

田中 康陽

太宰治「ヴィヨンの妻」論

田中優也翔

―「冒頭」の「妻」から

〈末尾〉の「さっちゃん」へ―

森見登美彦「夜は短し歩けよ乙女」研究

塚越 康太

芥川龍之介「地獄変」論

堤 純也

黄庭堅について

中川えりな

―褚遂良の臨本であるとする考察―

伊勢地域の音声言語の研究

中西 理紗

万葉集、大伴宿禰三依歌の研究

中西 隆太

『源氏物語』花散里論

小林 登巳

日本語ラップの研究

鍋本 咲

桃太郎の研究

西尾 裕斗

上橋奈穂子研究

西岡亜由美

梶井基次郎「闇の絵巻」論

西村 伶音

梶井基次郎「檸檬」論

野原 佑介

―「不吉な塊」と「深層心理」―

言霊の研究

橋本 雅輝

―忌詞を中心に―

『源氏物語』の研究

下村 紗瑛

—光源氏と玉鬘の恋愛について—
—大伴坂上郎女「怨恨歌」の考察—
—怨恨の対象をめぐる—

濱村 航貴

『源氏物語』の研究

東岡 愛莉

—薫と大君の成就しない恋—
—「お疲れ様」の意味・用法の変容—

樋口明日香

日本語史の研究

広瀬 奨真

—ら抜き言葉について—
—森鷗外論—

廣山 智彦

『源氏物語』の研究

福田 理恵

—六条御息所と未摘花—
—運搬に関する方言動詞の研究—

藤村 嶺弥

『世間胸算用』論

前川 莉菜

—「小判は寝姿の夢」について—
—はやみねかおるの研究—

川北虎之助

新美南吉研究

増田 眞子

—「手袋を買いに」の母狐について—
—国木田独歩「春の鳥」論—

松浦 静華

—「白痴」者とその家族—
—宮澤賢治「セロ弾きのゴーシュ」論—

松田 凪

天平万葉の研究

松本 弦樹

夏目漱石「手紙」論

水谷 まこ

—虚構・道楽・手紙の返却—
—色彩語彙の研究—

水野 望江

黒島伝治論

水森 誠人

—「渦巻ける鳥の群」における—
—正宗白鳥の影響—

南 朱莉

文学とカフェについての研究

紋田 隆史

視覚障害者の読書研究

山崎 成

「赤とんぼ」の研究

山本奈々美

小林多喜二研究

山本 真緒

伊賀圏域の方言研究

—伊賀方言番付について—

隷書についての研究

吉尾 綾華

—波礫の変遷と完成形について—
—伊賀地方の地域語研究—

吉川 真由

—児語の食物語彙—
—葛洪の仙薬服用における限界について—

吉野 葉奈

『抱朴子内篇』と

『神仙伝』の比較を通して—

夏目漱石「坊ちゃん」論

若林 誠真

『源氏物語』の研究

渡瀬菜南子

—紫の上と女三宮の「幼さ」について—
(令和三年三月)

令和二年度卒業論文報告

岡野裕行

令和二年度末の卒業論文提出者は八十六名。提出に至らなかった者が五名(休学者は除く)。提出された論文のうち、優が二十名、良が四十五名、可が二十一名で、不可はいなかった。なお、九月提出者は二名で、いずれの評価も優であった。優秀論文上位九名の題目は次の通りである(第一位に複数名が並んだために上位九名までとした)。新家萌愛「『源氏物語』の研究—浮舟に見える和歌と本心—」、下村紗瑛「『源氏物語』の研究—光源氏と玉鬘の恋愛について—」、中林咲「『源氏物語』花散里論」、大形桃子「『源氏物語』の研究—浮舟と中将の君の母子関係—」、陳嘉励「『忠臣水滸伝』の研究—「通気粹語伝」をめぐる—」、馮霞「万葉集と玉台新詠の比較文学的研究—初期七夕歌と七夕詩を中心に—」、小山ゆう「『源氏物語』の研究—六条院支配の論理—」、濱村航貴「大伴坂上郎女「怨恨歌」の考察—怨恨の対象をめぐる—」、須崎垂莉沙「夏目漱石「夢十夜」論—第一夜について—」。以上。(准教授)

令和三年度 講義一覽

〔文学部〕国文学概論ⅠⅡ(田中康二・小堀洋平) / 国語学概論ⅠⅡ(齋藤平) / 漢文学概論ⅠⅡ(松下道信) / 国文学史概説Ⅰ(大島信生・吉井祥・深津陸夫) / 国文学史概説Ⅱ(田中・岡野裕行) / 古典文学講義ⅠⅡ(大島・吉井・深津・田中) / 近代文学講義ⅠⅡ(岡野) / 国語史概説ⅠⅡ(齋藤) / 古典文学講義ⅠⅡ(大島・吉井・深津・田中) / 近代文学講義ⅠⅡ(石谷春樹) / 国語学講義ⅠⅡ(齋藤) / 漢文学講義ⅠⅡ(松下) / 専門演習ⅠⅡ(大島・吉井・田中・岡野・齋藤・松下・上小倉一志) / プロジェクト研究ⅠⅡ(大島・吉井・田中・岡野・齋藤・松下・上小倉) / 言語表現学概論ⅠⅡ(濱畑静香・齋藤) / 国文学概説ⅠⅡ(大島) / 日本語教授法(濱畑) / 社会言語学(齋藤) / 図書館概論(岡野) / 情報資源組織論(千邑淳子) / 子どもの本と児童サービス(海上和美) / 図書館情報資源概論(岡野) / 読書と豊かな人間性(箕浦龍一) / 書物と図書館の文化史(岡野) / 芸能論(前田憲司) / 日本文化史ⅠⅡ(C・メイヨ) / 世界宗教史ⅠⅡ(宮坂清) / 日本宗教史(多田實道) / 書論・鑑賞(上小倉) / 書ⅠⅡ(上小倉) / 書ⅢⅣ(岡野央) / 書ⅤⅥ(山本のり子) / 書ⅦⅧ(上小倉) / 卒業論文(大島・吉井・田中・岡野・齋藤・松下・上小倉)

〔大学院〕国文学研究基礎論(深津) / 国文学研究法演習(深津) / 古典文学特殊講義ⅠⅡ(大島・深津・田中) / 国語学特殊講義ⅠⅡ(齋藤) / 漢文学特殊講義ⅠⅡ(松下) / 古典文学研究演習ⅠⅡ(大島・深津・田中) / 国語学研究演習ⅠⅡ(齋藤) / 漢文学研究演習ⅠⅡ(松下) / 課題研究ⅠⅡⅢⅣ(大島・深津・田中・齋藤・松下)

令和三年度研究発表会

発表要旨

令和三年十月三十日(土)

谷崎潤一郎「痴人の愛」論

―ナオミと讓治の関係―

安保花音

「痴人の愛」の女主人公ナオミは悪女であり、その肢体の魅力に主人公讓治は惑わされ墮落してしまふ、というのが今日まで伝わるナオミのイメージである。しかし、作品の内容に着目すると、ナオミが悪女で讓治が善人である構図は崩壊する。本発表は、「痴人の愛」を他の谷崎作品と一度切り離し、ナオミは本当に悪女なのか、ナオミと讓治はどのような関係であったかを内容に焦点を当てて考察した。

まず、讓治の語る本文に沿って、讓治に善人のイメージが、ナオミの悪女のイメージがついていることを確認した。つぎに、ナオミと讓治の結婚に注目した。結婚は讓治が強引に押し進めたものであった。二人の結婚の約束は世間によくある家庭を築かないこと、讓治はナオミの願いを何でも聞くこと、ナオミは讓治の理想の女性になること、



いつまでも友達のように暮らすことであった。讓治にとつての理想の女性とは、精神的、肉体的に美しく、西洋人の前に出しても恥ずかしくない女性であったが、ナオミは最後には精神的、肉体的に美しく、西洋人の前に出しても恥ずかしくない讓

治の理想の女性になった。そして、ナオミと讓治の関係性について本文をもとに考察した。結婚当初から讓治がナオミに屈服するまでの場面にかけては、讓治優位の夫婦であったが讓治がナオミに屈服した場面では、一見ナオミ優位の夫婦関係になった。しかし、ナオミは讓治に対等な立場と結婚した時の約束の履行のみを求めていることに注目すれば、二人は互いが欲するものを与え合い、結婚という契約で結ばれた夫婦となったのであった。

讓治⇨善人、ナオミ⇨悪女の構造は成立したが、二人の関係を善悪で捉えるべきではない。ナオミは悪女とは言えず、二人は互いに結婚という契約で依存しあう夫婦という関係になったと結論付けた。

(博士前期課程)

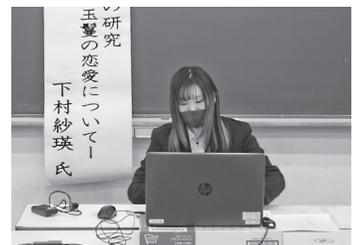
『源氏物語』の研究

―光源氏と玉鬘の恋愛について―

下村紗瑛

本論文は、光源氏と玉鬘の恋愛に着眼し、玉鬘の光源氏への思いについて考察したものである。先行研究では、二人は両想いであるという論が一般的であったが、光源氏が玉鬘に恋情を抱いていることは、本文に示されているものの、玉鬘が源氏に恋情を抱いているかは実は曖昧である。本稿では、玉鬘の源氏への心情を明白にするために、玉鬘の心情にまつわる用語の考察「男・男君」「女・女君」という人物呼称から見る男女関係・養父(源氏)と実父(内大臣)の対比という三つの観点から確認することとした。

まず、玉鬘の心情にまつわる用語を確認したところ、恋情を訴える源氏に対して、初めは、不快感を表す用語が用いられていたが、次第にこのよ



うな用語は使用されなくなり、玉鬘は徐々に源氏を慕うことが読み取れた。とは言え、玉鬘は源氏に恋情を抱いているとまでは確かでない。

そこで、玉鬘の源氏への思いを追求するにあたり、恋の場面や夫婦関係を強調する「男・男君」「女・女君」という呼称に着目した。その結果、片方に使用されている場合は、片思いであり、男女共に使用されている場合は、①互いに恋情を抱いている関係と、②片方のみが恋情を抱いている関係の二応があった。①②の関係に共通するのは、夫婦関係または肉體関係にあることが明らかになった。

源氏と玉鬘の場面で「女・女君」の呼称のみ用いられていたのは、二人に肉體関係がなく、玉鬘に源氏への恋情がないことを意味している。

この養父としての思慕をより深く追及するために、玉鬘の実父(内大臣)の子供への対応の仕方と源氏の玉鬘への対応の仕方を比較した。実父の子供への対応は熱量が感じられない。一方、源氏の対応は、待遇の良さから、玉鬘は源氏にとつてもないありがたみを感じていると考える。

玉鬘は、初めこそ源氏に嫌悪感を示してきた。しかし、氣立ての良い源氏に徐々に心を開いていくのである。ただし、玉鬘の心情にまつわる用語と人物呼称を見る限り、源氏に恋情を抱いていないと言えよう。だが、尽力してくれる源氏にありがたみを感じる。実父と比較するにつけて養父として慕う気持ちが強まるのである。

(博士前期課程)

黒島伝治論

「渦巻ける鳥の群」における

正宗白鳥の影響

水森誠人

黒島伝治の「渦巻ける鳥の群」は、作者のシベリア出兵の経験をもとにしたプロレタリア文学の物語である。

「渦巻ける鳥の群」の先行研究や同時代評の中には、「黒島の作品は自然主義的だ」と評するものがいくつか存在する。初めてこの作品を読んだ時、正宗白鳥の「牛部屋の臭ひ」を思い出していた私は、正宗白鳥の影響を受けているから「自然主義的」な作品になっているのではないかと考えた。本発表は黒島伝治「渦巻ける鳥の群」における正宗白鳥の影響について試みる。

「渦巻ける鳥の群」が「自然主義的だ」という指摘は同時代評でされている。また、これによると「渦巻ける鳥の群」以前の作品からもそのことが指摘されているようである。

次に、黒島が影響を受けたであろう作家については、先行研究で、ドストエフスキー・トルストイ・チェホフ・メーテルリンクなどの海外作家や、志賀直哉・正宗白鳥・島崎藤村ら日本作家を主に挙げている。では、



本人はどうか言及しているのか。黒島は朝日新聞に「藤村と白鳥とは、明治以来の作家のうちで真剣に人生に立ちむかつてゐる作家として、文学修業の初期に私はむさぼりよんだ。」としている。また、黒島のシベリア従軍の経験を

記録した『軍隊日記』にも正宗白鳥の名前が確認できた。

次に、「渦巻ける鳥の群」が「牛部屋の臭ひ」の影響を本当に受けているのかについて検証した。まず、両作品に共通するのは「臭い」について記述している場面だった。高橋敏夫は「臭い」において、「自然主義文学の特徴のひとつをなすもの」とし、「牛部屋の臭ひ」にいたって、においての遠近法とでもいふべき序列化を獲得する。」と述べている。「渦巻ける鳥の群」でも「においての序列化」を発見し、「黒島の作品は自然主義的だ」と指摘される一端を確認できた。

以上のことから、黒島伝治の作品は「自然主義的」だと言われる理由の一つは、正宗白鳥「牛部屋の臭ひ」の影響を受けているからだと結論付ける。(博士前期課程)

令和三年度講演会報告

影山尚之氏

万葉集

恋心の形象

辻希乃華

令和三年十一月十一日に開催された国文学会講演会では、武庫川女子大学教授の影山尚之先生に、「万葉集 ―恋心の形象―」と題してご講演いただいた。以下、講演会の内容をまとめていく。

万葉集最初の恋歌として挙げられていたのは、巻二の「磐姫皇后、天皇を思ひて作らず歌四首」。特に注目すべきなのが八六番歌の「高山の岩根しまきて死なましものを」である。本来、雅びやかであるべき和歌には「死」という表現は用いられない。しかし、恋歌に限っては「死」に関して寛

容である。これは、マイナスの心境こそが恋であるという共通理解のもとに成り立っているからだ。現代では「恋死」ということは考えにくいだが、当時の都市生活者を中心に歌われており、若者言葉のような立ち位置とされる。令和の時代を生きる我々にも恋心はあり、それを表現する言葉も表現方法も様々あるが、それは万葉時代とは大きく異なる。言葉は年月をかけて変容し、新たな表現が生まれていくのである。

その例として、当時特定の物象に寄せて恋情を表現する「寄物陳思」や、「遊仙窟」を用いた歌などが存在していたが、中でも注目したいのが「類型」というものである。「恋の繁きに」や「恋ひ渡るかも」等、同じ表現で詠まれた歌が多数存在しているのである。いくつも歌があることにより、一種のマニユアルを作成したこととなり、安心感が保証される。これは事物によって意味が



教職員及び委員の学生のみ教室に集まり、その他の学生はオンライン形式で影山先生のご講演を拝聴した。

相手に正しく伝えることができるため、多少思い切った情景を使用することができる。これも若者言葉のようなものである。

このような形で表現されてきた恋心であるが、果たして「初恋」はどのような立ち位置にあるのだろうか。ただし、「初恋」の語は『浮世草子』が初出で、中世以前にこの語は見られない。万葉集においては「ソム」という補助動詞が「思ひそむ」の形で出現するケースが多い。しかし、「我妹子に恋ひて乱ればくるべきに掛けて搓らむと我が恋ひそめし」(4:六四二、湯原王)のように恋によって心が乱れた経験があることが窺える歌がある。とある対象に恋情を自覚したということが詠みこまれているので、「初恋」であるとは考えにくい。また、「ソム」は「し始める」という意味の語であるため、人生においてはじめて経験するものに使用する語ではなさそう。万葉集において「初」を冠する名詞はあるものの、それらは「初萩」や「初花」などその年に初めて認知した現象に用いられるものである。「大伴宿禰家持が初月の歌一首」の「振り放けて三日月見れば一目見し人の眉引き思ほゆるかも」(6:九九四)は家持が十六歳の頃の歌であるし、恋情を初々しく語っていることから人生において初めて経験する恋であると考えられるが、真偽は定かではない。

なぜ万葉集には「ハジメテ」という語が出ないのか。それについては、「ハツ」や「ソム」という言い方で代えられていると考えられる。動詞「ハジメ」名詞「ハジメ」等の用例はあるものの、「ハジメテ」という語は古くは歌語ではなかったのである。二二二一番歌の結句が「ハジメテアリケレ」か「ソメテアリケレ」の二つで説が分かるのはそれであろう。

恋情の譬喩としての「初」は三九七八番歌の「常

初花」が挙げられる。第四句から第七句「いやなつかしく相見れば常初花に心ぐし」で恋い初めた(恋い慕い始めた)時期に引き戻す効果がある。このように「初」という言葉に関しては様々な用例があるため、今後も万葉集における恋心ないしは初恋に関しては調べを進めていくべき事柄である。いつの時代でも人は誰かに恋をする。しかし、その表現の方法は時代によって異なる。万葉集においては、「恋死」「寄物陳思」「ソム」などにより恋心の形象がなされている。

私は卒業論文で寄物陳思と相聞について取り上げたいと考えているため、本日の学びを生かした研究を今後はしていけたらと思う。

最後になりましたが、今回ご講演いただいた影山尚之先生に厚く御礼申し上げます。(三年)

合格・就職体験記

《教職・三重県・小学校》

教職をめざす皆さんへ

萩原麻衣

教員採用試験に対して意識し始めたのは三年生の夏休みです。小さい頃から教師になることが夢でしたが、教職の授業を受けていくにつれ、自分に本当にできる仕事であるのか不安になることがあったからです。就職活動をするか、教員採用試験を受けるか迷う時期がありました。しかし、十一月頃に友人に「一緒に教員採用試験の勉強をしないか」と誘われたことをきっかけに、友人と共に頑張ろうと決心しました。大原学園の講座をとっていたので、十二月はその復習を中心に勉強をしていました。本格的に勉強を始めたのは一月頃です。

また、私は小学校二種免許の取得で、観察実習のみになってしまおうのが不安だったので、四年生からは小学校の学生ボランティアにも行くようにしました。

二次試験の対策では、たくさん先生方のアドバイスをいただきながら、勉強をすることができました。他学科の友人とも面接や模擬授業、実技の練習をしました。

私が最後まで頑張ったのは、周りの方々の支えがあったからこそだと思います。皆さんも、周りの人との支え合いを大切にしながら、教員採用試験に励んでください。応援しています。(四年)

《公務員・三重県・司書》

積み重ねて自信に

川村花音

公務員試験に向けてまず取り組んだのは数的処理と判断推理でした。私は数学に苦手意識が強かったためこの二つは特に回数をこなしました。回数を重ねていくうちに似た問題に当たることが増え、以前解いたことのある問題だという認識から臆することなく問題に挑めるようになりました。

暗記科目は、重要な部分を直接テキストに書き込んでいました。直接書き込むことで隙間時間でも簡単に見ることができ、また、自分で書いたことによりただ暗記するだけでなく、関係を考えて暗記することができたように思います。日本史は語呂合わせや替え歌を使用し、楽しみながら覚えることを意識しました。試験勉強のいい息抜きにもなっていました。

二次試験の面接対策は就職支援の方にも協力してもらい練習を重ねました。初めはぎこちな

かった受け答えも練習を積み上げていくうちに余裕をもって行えるようになりました。

公務員試験は初めてのことが多く不安になることも多いですが、しっかりと準備を行うことでその不安は僅かながら和らげることができると私は思っています。皆さんの夢が叶うことを願っています。(四年)

『企業・株式会社百五銀行』 就職活動で意識したこと

前田結菜

私が就職活動を始めたのは三年生の十二月であり、かなり遅めのスタートでした。自分のやりたいことも明確になっておらず、夏のインターンにも参加していなかったのは、はじめはとても不安でした。そんな私が第一志望の企業から内定を頂くことができた理由は、「自分をj知る」ということを意識してきたからだと思ひます。自分のことを改めて見つめ直すと、今まで知らなかつた自分を知ることができました。自分を知るといふことは、就職活動で長所や短所を聞かれた時にも役に立ちますが、何より「自信」に繋がりました。就職活動は自分で進めていかなければならないものであり、周りを頼ってばかりはいられません。自分に自信を持つことが、就職活動を行っていくうえで大切だと実感しました。

国文学会活動報告

【行事】

(令和三年)

4・29 総会(前年度活動報告、会計報告、新年度予算案審議、新役員紹介、研究部会紹介)

10・30 研究発表会

谷崎潤一郎「痴人の愛」論
— ナオミと讓治の関係 —

安保花音

『源氏物語』の研究

— 光源氏と玉鬘の恋愛について —

下村紗瑛

黒島伝治論

— 「渦巻ける鳥の群」における

正宗白鳥の影響 — 水森誠人

11・11

講演会 (GoogleMeetによるオンライン開催)

万葉集

— 恋心の形象 —

武庫川女子大学教授 影山尚之氏

(令和四年)

1・31 会報 50号発行

【研究部会】

上代文学研究部会 (火曜日)

萬葉集

中古文学研究部会 (火曜日)

平安文学関係資料を読む

中世文学研究部会 休会

近世文学研究部会 (火曜日)

近世和歌・国学関連文献を読む

近代文学研究部会 休会

大島信生 教授

吉井 祥 助教

深津睦夫 教授

田中康二 教授

令和2年度【国文学会】収支決算書

令和2年4月1日から令和3年3月31日まで

Table with 5 columns: 科目名, 令和2年度予算額, 決算額, 差異, 備考. Rows include 新入生会費, 卒業生会費, 教員会費, etc.

令和3年度【国文学会】収支予算書

令和3年4月1日から令和4年3月31日まで

Table with 5 columns: 科目名, 令和3年度予算額, 令和2年度予算額, 差異, 備考. Rows include 新入生会費, 教員会費, 受取利息, etc.

Table with 5 columns: 科目名, 令和2年度予算額, 決算額, 差異, 備考. Rows include 見学会・散歩会, 研究発表会, 講演会, etc.

Table with 5 columns: 科目名, 令和3年度予算額, 令和2年度予算額, 差異, 備考. Rows include 見学会・散歩会, 研究発表会, 講演会, etc.

国語学研究会 (毎月一回) 齋藤 平 教授

日本語の諸問題

漢文学研究会 (水曜日) 松下道信 教授

漢学関連文献を読む

文学館・メディア史研究会 (木曜日)

文学館やメディアの諸問題を検討する 岡野裕行准教授

委員

委員長 大嶋美輝 (3)

書記 西岡愛梨 (3)

会計 服部紋乃 (3)

講演委員 谷川奈穂 (3)・田中美有 (3)

旅行委員 森井菜月 (2)・水谷護 (2)

会報委員 安保花音 (M1)・下村紗瑛 (M1)・法月優希 (1)

一般委員 遠藤彩乃 (4)・東久保悠斗 (4)・西田紀香 (4)・榎本文哉 (4)・亀井侃 (1)

皇學館大学国文学会会則

第1条 本会は皇學館大学国文学会と称する。

第2条 本会は事務局を本学文学部国文学研究室に置く。

第3条 本会は国語学国文学の研究の促進及び会員相互の親睦をはかることを目的とする。

第4条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1、研究会の開催。

2、講演会・研究発表会の開催。

3、研究誌・会報などの発行。

4、その他目的を達成するために必要な事業。

第5条 本会は皇學館大学大学院文学研究科国文学専攻及び文学部国文学科に關係する教職

員・旧教職員・卒業生・在学生(但し国文学科学生は全員加入を原則とする)・また本会の趣旨に賛同して入会を希望する者をもって構成する。

第6条 本会の運営のために次の役員を置く。

1、会長 一名。

2、幹事 若干名。

3、学生委員 若干名。

第7条 会長は国文学科主任教授がこれにあたり、本会を代表して会務を統括する。幹事は国文学科専任教員をもってこれにあて、本会の事業に関する評議を行うものとする。幹事は随時開くことができる。学生委員は、大学院学部各学年より選出され、幹事会の指示を受け、会運営上の通常業務にあたる。学生委員として次の委員を置く。

総務委員 講演委員 旅行委員 書記委員

会計委員 会報委員 資料委員

第8条 役員は任期は一年とする。但し重任は妨げない。

第9条 本会は年一回春季に定期総会を開く。臨時総会は幹事会の議決を経て開催する。

第10条 本会の会費は別にこれを定める。

第11条 本会の会計年度は四月より始まり三月までとする。

第12条 本会会則の変更を必要とする場合は幹事会において審議し、総会の承認を経なければならぬ。

付則 会費は次のように定める。

1、在学生は入学時に四年間分六〇〇〇円を納めるものとする。

本会則は昭和五十六年十一月一日より実施する。

付則については平成三十一年四月二十五日より改正実施する。

編集後記

○国文学会会報第五〇号をお届けします。半世紀という時間の重みを感じる節目となります。

○今号にご本人からも寄稿いただきましたが、小堀先生が昨年度末でご退職されましたことをご報告いたします。小堀先生はともにも真面目なお人柄で、多くの学生たちから慕われておりました。私が毎年企画している伊勢河崎一箱古本市にも、小堀先生が指導学生を連れてふらりと遊びに来てくれた姿を懐かしく思い出します。新天地でもどうぞ活躍を。

○小堀先生が抜けたことで、令和三年度は国文学史や専門演習の近代文学分野も急遽私が担当しました。前任の三品先生が抜けたときにも感じましたが、組織には変わらざるをえないタイミングがありますね。

○そして残念なことに、今年度も文学散歩とフィールドワークが中止となってしまいました。相変わらず活動自粛の日々が続きますが、もう少しの辛抱でしょうか。

○次年度からは近代文学分野に新しい先生をお迎えし、国文学科も新体制となる予定です。新しい風とともに、しっかりと着実に国文学科の歩みを進めていきたいと思います。(岡野記)

国文学会会報 第五〇号
 令和四年一月三十一日発行
 編集・発行者 皇學館大学国文学会
 (代表 松下道信)
 516-8555 伊勢市神田久志本町一七〇四
 電話 〇五九六(二二)六四五七
 印刷所 アイブレーション